

エリートコースというもの

“学閥”という言葉があります。これは外国にはない言葉ではないでしょうか。もっとも、学閥の“閥”には、閥という言葉が示すほど強い意味があるとは思えませんが……。

それにしても、エリートコースというものがあって、たとえば、東大に進むためには日比谷高校、その日比谷高校に進むためには麴町中、またそれに進むためには永田町小、または番町小というコースのような最も進学率の高い学校に争って入学させようとする傾向がいまだにあることは、わが国特有の現象だろうと思います。

これは、日本人が非常に敏感で、頭の働きがよく、しかも行動的であることの表われだとは思いますが、決して良いことではありません。

秀才校の生徒はすべて秀才か？

わが国の古い諺に、「朱に交われれば赤くなる」と言われていて、秀

才の多い学校に入れさえすれば、どんな能力の者でも秀才になれるように考えている人が、今の日本には多いようです。

しかし、この考えはまちがっています。以前、日比谷高校の教師をしていた私の親友がよく語ったものです。「この学校の生徒の三分の一は、別の高校に進んでいたらもっと伸びたろうに、と実に残念に思われてならない」と。

日比谷高校に入学するくらいの生徒は、中学では必ず一、二を争った成績の良い生徒に違いありません。しかし、どんなに選ばれた生徒の集まりでも、その集団の成績が均一化することは決してありません。学業が進めば進むほど、差が開いていくものです。

長距離レースを見てごらんください。最初は集団になって走っていますが、激しいせり合いが僅かの間続き、そのせり合いに勝った者は快調に走り続けますが、負けた者は見る見る離されて、やがて落伍する者さえ出て来ます。

昔、私が教頭をしていた中学で、能力別のクラス編成をしたことがあります。仮に200人の生徒がいるとしますと、1番から50番までの成

績の者が A 組、51 番から 100 番までの者が B 組、101 番～150 番が C 組、151 番～200 番が D 組となるわけです。

この編成によると各クラスが能力的に均等化され、指導がしやすくなり、学習効果があがる利点があります。しかし、その反面、各クラスの下位の成績の生徒、たとえば、A 組の 50 番及びこれに近い生徒、B 組の 100 番及びこれに近い生徒……たちは、目に見えて学力が低下していきました。

能力別クラスの欠点

その代り、B 組の 51 番及びこれに近い生徒、C 組の 101 番及びこれに近い生徒、とりわけ D 組の 151 番の生徒など、今までクラスの下位にあって全く目立たぬ存在であったものが、この編成により、クラスの最優秀生徒となり、クラスの指導的立場に置かれて、自信を持つと共に驚くほど学力の進歩を見せたものです。

このクラス編成は、私の提案で、その効果については自信をもって

実行したのですが、各クラスの下位に振り分けられた生徒の学力の低下のひどさにはすっかり驚かされてしまい、この試みは一年だけで止めてしまいました。人間というものは、人々に認められると自信がつくと共に実力がつくものであり、反対に人々に無視されると、自信を失い伸びるものも伸びなくなるものです。

自信が能力を伸長する

だから、日比谷高校に行ったために霞んだ存在になり、自信を失って成長が止まってしまうということは、私にはよく理解できます。事実、こんな実例もあります。それは、中学ではいつも一番という生徒で、都立の三流校に進んで入学した者です。

その生徒の父親は学校長を勤めていた人で、子供の体力が強健ではないので、勉強のきつい一流校ではかわいそうだから、遊んでいてもトップクラスにいられる三流校を選んだというわけです。

さて、その高校では、創立以来第一の秀才が入学したというので教

員室の評判になり、先生方の期待を一身に背負って勉強することになり、結局、国立の一流大学にストレートで入学しました。

一流高校でも、僅かに上位の者しか入学できないという一流大学に、三流高校から入学したのです。恐らく、その生徒が一流高校に学んでいたら、これほどうまくはいかなかったでしょう。三流校で、自信をもって伸び伸びと実力を養ったために、能力を十分に伸ばすことができたのだと思います。

一流校に入学できて、そのための自信は得られたとしても、毎日、毎時間、劣等感を抱かされ続けたら、人間はだめになってしまいます。それよりは、三流校で、そのための劣等感を抱かされたとしても、毎日、毎時間の学習で自信をつけられることの方が大切なのです。なぜなら、毎日、毎時間の学習によって人間は成長するものだからです。その毎日、毎時間の学習に自信をもってやるか、劣等感をもちやるかが、成功と失敗とを分けているのです。

それに、人間というものは、ある種の劣等感が向上の動力として必要なのです。前者の場合のように、自信を失い、努力する意欲を失わ

せるような劣等感では困りますが、後者のように、劣等感があって、これを別の面で補おうとして、初めて大いなる努力が払われるのです。世の大きな発明発見や、偉人の立身出世の原動力は、たいてい何かの劣等感を補おうとする努力であることがわかります。

だから、私は、あえて一流校に進学することに価値を認めません。一流校で悠々一番になる実力の持ち主ならばよろしい。ついて行くのにせい一杯だというなら、三流、四流でもよい。悠々とやれる学校で勉強することをおすすめします。三流四流でも悠々勉強できないようなら、学校へ行くことを止めるべきです。なぜなら、今の学校は、どんな人でもその能力を伸ばしてくれるようにはできていないからです……。